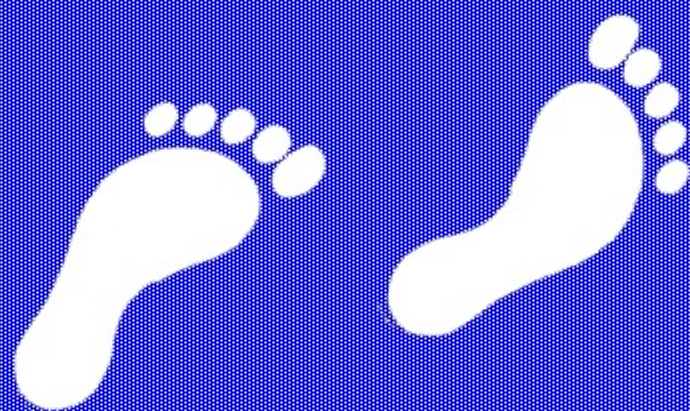


多気郷土資料館編

郷土ゆかりの 人たち



か も さん だ ゆ う 賀茂杉大夫 (1500年代)

に う ごよみ れ き し 丹生暦を作った暦師

に う ごよみ 丹生暦のはじまり

賀茂杉大夫は、戦国時代、享禄5年（1532年）に伊勢国司北畠晴具によって暦師の地位と暦の版行・頒布を安堵（保証）された。

に ん き み や げ に う ごよみ い せ ごよみ 人気の土産 丹生暦から伊勢暦へ

伊勢神宮の御師が各地の檀家を回る時にお札とともに土産として配った丹生暦が人気となった。この丹生暦を真似た伊勢暦が伊勢山田で作られるようになり、伊勢の御師によって全国に広まり、丹生暦に代わって隆盛した。

さん だ ゆ う 杉大夫ゆかりの地

杉大夫の館は、丹生の北方、西川にあったと伝わる。また、丹生にある智禅寺の山門は、賀茂家の門を移築したものとされている。

暦略巳乙六十保天											
小 正 二せつ廿八日 三 中十四日		大 二 中十四日 四 せつ一日		金神 み 辰 四月十六日四時六分左と下の月そく間よりかけはしめ 皆既 八時八分右と下の間におはる		としとく(歳徳)あきの方 さるとり(申酉)の間万よし 土公 春八かま(寅) 秋八井戸(戌) 夏八かと(酉) 冬八には(辰)		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日	
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二 中廿五日		上天一 (てんいちてんじょう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日		れく方十 (じゅつほう) 二 月 廿二日 三 月 廿三日 四 月 廿四日 五 月 廿五日 六 月 廿六日 七 月 廿七日 八 月 廿八日 九 月 廿九日 十 月 三十日 十一月 一日 十二月 二日					
六 中十九日 八 中廿二日 十 中廿三日 十二 中廿四日		七 中廿一日 九 中廿三日 十一 中廿四日 十二									

にしむらひこざえもん 西村彦左衛門 (1774~1830)

たちばいようすい しゅしょうしゃ
立梅用水の主唱者

出身地 多気町^{にう}丹生

西村彦左衛門^{ともみち}和通の三男として丹生に生まれる。西村彦左衛門^{ためあき}為秋と称す。30歳で西村家4代目を継ぎ^き紀州藩地土となる。農業に従事するとともに、副業として酒造業も営む。



たんがんじょうじゅ くろう 嘆願成就までの苦労

1808年、庄屋長谷川周八と立梅用水の開設を^{かいせつ}発案し、^{はつあん}波多瀬、^{はたせ}片野、^{かたの}朝柄、^{あさがら}古江、^{ふるえ}丹生五ヶ村の庄屋会議を持ち、^{にうごかそん}工事に同意。紀州藩に建設嘆願書を^{しやうやかいぎ}差し出す。しばらく後、自分たちで出合いをして工事に着手する。しかし、紀州藩からの音沙汰はない。次第に百姓たちの苦情も出始める。費用の捻出、長谷川周八の死などの重圧に彦左衛門は旅に出る。

きしゅうはんちやうこうじ たちばいようすいかんせい 紀州藩直営工事で立梅用水完成

1817年、紀州藩勘定奉行に願書を持参し、藩主の御目通りを願い出る。同年秋、乙部才助が測量を始めることとなる。

1820年、紀州藩直営工事に着手。1823年、立梅用水完成。飯南町粥見の井堰から^{いなんちやうかゆみ}櫛田川の^{いせき}水を取り入れ、各村々に送水する用水が完成する。全長28km。この灌漑工により160haの水田が広がった。

立梅用水ゆかりの碑

立梅堰^{せきぼり}碑「源遠流長」が勢和中・小学校坂下に建つ。

立梅用水開削の背景

戦国の世が終わり、徳川幕府は各地の大名による土地支配体制を確立し、年貢米によって財政的な基盤とした。各藩では米の増産が政策の基本となり、新田開発、大規模灌漑システムの構築（灌漑用水、溜池、井堰普請）が行われた。立梅用水開削前から、紀州藩でも、五桂池（1678年完成）をはじめ、各地で多くの灌漑工事等がおこなわれていた。

立梅用水と紀州流土木工法

立梅用水完成をさかのぼることおよそ100年前。紀州藩の伊勢普請方、大畑才蔵が川俣川（櫛田川）を1か月にわたって調査をした時の絵図が残っている。そこに記されたルートは今の立梅用水とよく似ている。

大畑才蔵は紀州式と呼ばれる土木工法を開発している。これは用水全体を計画し、いくつかの場所で同時に工事を並行して進める工法であり、工期を短くできる利点がある。

立梅用水が丹生にもたらした恵み

【資料】丹生の戸口変遷

1640 (寛永17) 年	1670 人	504 軒
1808 (文化5) 年	1066 人	265 軒
1889 (明治22) 年	1530 人	308 軒

1640年から1808年の170年の間に、丹生の人口は^{げきげん}激減した。
^{すいぎんこうざん}水銀鉱山の閉鎖、^{へいさ}丹生商人の没落、1803年の大火、農業用水に
^{めぐ}恵まれぬ田畑の荒蕪化が主な原因であろう。1889(明治22)年には人口回復が見られる。単純に結びつけることはできないが、
1823(文政6)年、^{かんがい}灌漑用水の敷設により、生産性が著しく高まり、^{よじょうのうさんぶつ}余剰農産物は様々な職業をうみ、それによって豊かになった地域は、農業以外の産業も支え、地域の豊かな^{へんかく}変革につながったのではなかろうか。もし、立梅用水がなかったら……。

おかやまともきよ

岡山友清 (1789~1878)

「伊勢錦」の開発

商人として

9歳で父親を亡くし、若くして大坂や江戸で商業の経験を積む。

27歳で帰郷し、木綿の行商や立梅用水工事を側面から支えるなどして暮らしの基礎を固めた。

伊勢錦開発、増産に尽力

色太の野呂清助らとともに、1849年に伊勢錦を発明する。苗代の籾種の量を減らすなどの農業技術の改善も行い、1反当たり、6俵を切れることがなく、豊作の年柄では、7、8俵ずつの収穫をあげることができた。

出身地 多気町朝柄

朝柄村に生まれる。定七とも呼ばれる。

悲運がおそう

片野から妻をもらうが妻と子どもを痢病で失う。その後、後妻を迎えたが、行商に手広く活動した長男もなくす。

不二道を信仰

家族を失った悲しみを支えたのは江戸時代に広まった民間宗教の一つ、不二道であった。

友清による農業技術改良の背景には不二道の思想があり、その信者間の交流が伊勢錦を伝播させるのに役立った。

〈資料〉米の収穫量

今の半分しかとれなかった江戸時代の米

農業技術が進歩した現代では、うまく育てれば「1反で10俵」の米の収穫を得ることができるといわれます。しかし、江戸時代はとてそそれだけの収量を上げることはできませんでした。江戸初期の資料から割り出してみると、「1反で4俵～5俵」となります。なんと、今の約半分程度しか採れなかったのです。

現代の日本の稲作がこれほどたくさんの収量を上げることができるのは、稲の品種改良、農薬や化学肥料の使用、農業技術の向上などの積み重ねがあったからです。

1反……………約10a

1俵……………60kg



まえがわただいち

前川唯一 (1912~2002)

「前川次郎柿」の発見



多気町の特産品 とくさんひん 前川次郎柿 まえがわじろうがき

今では全国で栽培され、甘柿の最高級品として知られる品種。
さいこうきゅうひん ひんしゅ

前川次郎柿の誕生 たんじょう

昭和15年ごろ購入した苗木30本の中より変異苗として発見したものの。ほかの木のものとくらべ、くぼみが浅く、全体に丸みをおびた実をつけている木が一本、あった。また、その実は、その先端部が割れてくるといふ次郎柿の欠点もなかった。さらに、熟するのが10日も早いことが分かった。

1957年、これを「前川次郎」と命名して、新品種として登録した。
めいめい しんひんしゅ とろうく



戦後、柿栽培が盛んに かきさいばい さか

1948年ごろから農家の人たちの果樹栽培への関心が高まり、さかに柿が植えられた。
のうか

1978年ごろ、平谷の前川唯一さんが改良した柿の新品種「前川次郎」を増産し、共同で出荷するなど果樹研究同志会(1952年結成)は積極的な活動を続けた。
ひらだに まえがわただいち かいりょう ぞうさん きょうどう しゅつか かじゅけんぎゅうどうしかい せっきよくてき かつどう つづ

多気町における甘柿栽培 あまがきさいばい

多気町における甘柿の栽培は、西外城田村矢田の政谷国太郎さんが1909年に静岡県宮口町から「次郎柿」を、岐阜県本巣郡から「富有柿」の苗木を購入して植えたのが始まりだと言われている。次郎柿の生産は西外城田村から佐奈村へと広がり、やがて町全域で作られるようになった。

の ろ げんじょう 野呂元丈 (1694~1761)

らんがく せんくしゃ ほんぞうがくしゃ
蘭学の先駆者、本草学者

ばくふ ばってき らんがく
幕府による抜擢 蘭学の道へ

47歳で御目見医師（将軍に謁見できる資格の医師）に任用される。

49歳の時、8代将軍徳川吉宗の命により、青木昆陽とともにオランダ語を学ぶ。ヨNSTONが著した「動物図説」を日本語に訳す。日本の蘭学の始まりであり、元丈は蘭学の先駆けとなる。

ばんねん
晩年は…

晩年は持病に悩まされた。
箱根や有馬で湯治をする。

1761年7月4日に没する。
東京泉岳寺に葬られるが、
波多瀬の野呂家墓地にも分
骨堂がある。

あいえんか
愛煙家

タバコが好き。当時波多瀬の
ブランド商品「波多瀬煙草」を
絶賛。

出身地 多気町波多瀬

多気町波多瀬村地土、高橋重英の次男として生まれる。母は矢津村地土富田五郎兵衛の娘、寿椿。20歳の時、父の従兄弟、医師の野呂三省の養子となる。



京都で学ぶ

1712年(20歳)、上京し、医学を山脇道立、儒学を並河天民、本草学を稲生若水に学ぶ。松坂出身の丹羽正伯は学友である。7年後、波多瀬村に帰り、家業の積善堂（診療所名）を継ぐ。

本草学者として

箱根、日光、富士山、信州、甲斐、駿河方面などに幕府の採薬使丹羽正伯らとともに薬草採集を行うなど、本草学者として頭角を現わす。

おもな著書、訳書

「狂犬咬傷治方」、「阿蘭陀本草和解」八巻
「阿蘭陀禽獣虫魚図和解」

にしむらひろよし 西村広休 (1816~1889)

おうか ごうしょう ほんぞうがくしゃ
相可の豪商が生んだ本草学者

じまゑ しよくぶつえん 自前の植物園で研究

海外からも植物を集め、千種以上の草木を育てる植物園「成蹊園」「櫨木園」を造った。今も邸跡には県指定天然記念物フウ樹が残っている。

名前など

ようめい ひでさぶろう つうしやう
幼名秀三郎、通称は三郎右衛門。寒泉と号す。

和歌への関心も

あらかき だひさもり
伊勢の神官、荒木田久守に師事、古学・国学と和歌を学ぶ。

けっこん 結婚は…

ゆうきたんばのかみひでまさ さだこ
25歳で京都の結城丹波守秀雅の娘貞子と。

出身地 多気町相可

ていたく かみおうか
邸宅は上相可の県道の南側にあったが、今は一般の住宅が建っている。

やまとや 相可の豪商大和屋の11代目

文化13年10月23日に生まれる。父親はひろやす 母親はいちしぐんさかきばら まるあか きえ ちん
広寧、母親は一志郡榊原村丸岡喜右衛門の娘ふみ

ほんぞうがく こころざ 本草学を志す

1830年、15歳の時に、京都に遊学、山本亡羊に入門し、本草学に関して18年間研鑽をつむ。広休が学んだ本草学は幅が広く、動物や植物、鉱物を分類する博物学に近い。

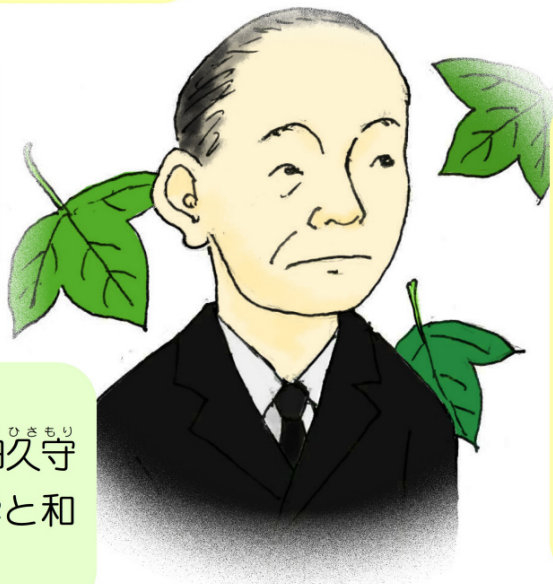
〈大和屋について〉

いせしょうにん ほんば まつさか
伊勢商人の本場は松坂であるが、本町近辺からも目覚ましい活躍をしたものが多くでた。丹生の梅屋（長井）、射和の富山（大黒屋）、家城、竹川、国分、蛸路の堀口、中万の竹口などで、相可の大和屋は中でも屈指の老舗であった。……（略）

やまとや ほんたく かま
大和屋は相可に本宅を構えて江戸本石町四丁目に店を置いた。ここで、呉服商、紙問屋、両替商を営んでいたが、さらに江戸以外にも野州の足利（現・栃木県足利市）や上州の桐生（現・群馬県桐生市）にも出店していった。

大和屋は両替商を営業としていたので、紀州、藤堂、会津、桑名など多くの大名、諸侯に金を貸す、いわゆる大名貸しを行い、莫大な御用金を調達した。その上明治新政府にも御用基金を上納していたのが藩制の崩壊、明治維新の大変動で、これら御用金のほとんどは回収されなかった。大和屋は日本近代の大波にのまれてついに倒産という奈落の底に陥る悲運に見舞われたのである。

大和屋当主は歴代、神仏崇拝の念熱く、諸所の神社、寺院に高額の寄進を行った。また、じぜんしん に富み、なんみん の救済や飢饉の際には多額の義捐金を拠出したり、食料米を放出して人々の生命を救った。（多気町史）



稲生若水につらなる 本草学者たち

【参考文献】

小玉道明編『伊勢商人 西村広休
の本草物産学』（平成27年 光出版印刷
株式会社）



伊多波武助 (1685~1772)

江戸時代に秋田で活躍した山師
(鉱山師)

波多瀬出身

波多瀬村で生まれ、もとは高橋姓であったが、秋田郡比内岩瀬村に移住し伊多波姓を名乗る。伊勢国多気郡波多瀬村から文字を取ったのだろう。

鉱物資源に恵まれた秋田

16世紀中期から17世紀前半にかけては鉱山開発の最盛期と言われた。秋田（出羽国、久保田藩・佐竹藩）はその当時、銅、鉛の主要産地であった。出羽国でも秋田藩領最大の貴金属山として院内銀山があり、阿仁銀山とともに注目される存在であった。

藩財政に貢献し秋田藩士に

武助は鉱山経営により莫大な富を築き、藩に多額の献金を行い財政に貢献、武士に取り立てられた。武助が遠く秋田にまで進出し、成功を収めたのは鉱山師としての高い技術があったからではなかろうか。

北村覚蔵 (1883~1948)

丹生水銀鉱再開発の立役者

車川出身

車川村の酒造家の六男として生まれた。

水銀採掘を目指す

昭和4年から昭和12年まで、東京で本屋を経営していたが、独学で地質学・鉱床学を習得し、その知識をもとに、自宅の庭先で辰砂（水銀鉱石）から水銀を採る実験を繰り返した。東京から帰った覚蔵は、私財を投じて調査をし、試掘を始めたが、亡くなってしまう。旧多気町の中世古亮平が、装置を実用化し、昭和43年から48年の間採掘され、145トンの水銀を産出した。

鉱山業に関わった



陸中国鹿角郡尾去沢鉱山地図並坑業順序図(部分) 国立国会図書館デジタルコレクションより
※ 尾去沢鉱山…秋田県鹿角市にあった鉱山

丹生水銀との関連

奈良時代に盛んに採掘された丹生の水銀は、江戸時代には採算が取れず休山状態であった。伊勢から秋田への移住の背景に丹生水銀の採掘技術があったと考えられる。

みついたんきゅう 三井丹丘 (1729~1811)

むかいしほう 向井紫鳳 (1796~1858)

ほんぎょう がとう きわ ぶんじん が か 本業のかたわら画道を究めた文人画家

江戸時代中後期には、本業は本業として生活の基本とし、そのかたわらで様々な文事に傾倒していく人々が現れた。このような人を「文人」と呼ぶ。

※ 狭義の文人画家は中国から伝わった南宗画の形式で描く画家をさす。

本業は医師

丹生で代々続く医業の家に生まれる。三井家16代目として家業を継ぐ。医業のかたわら、絵、漢詩、篆刻、和歌、狂歌、書、煎茶など幅広い文事に関心を持つ。津の谷川土清に入門して国学を学んだ。

いけのたいが まごでし 池大雅の孫弟子

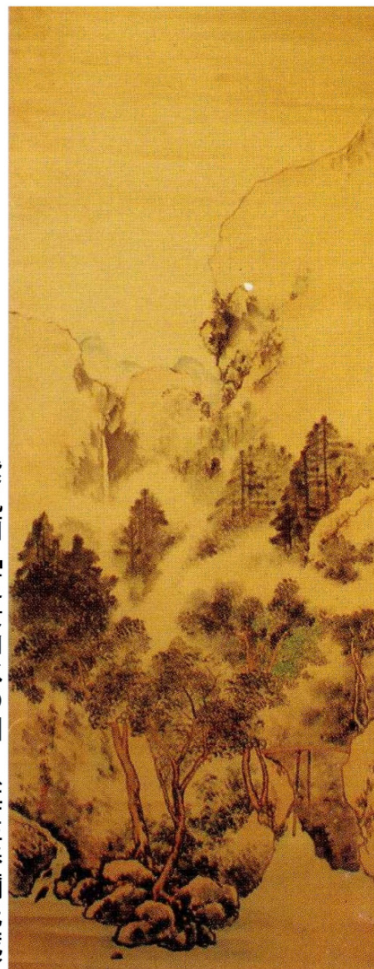
絵は、池大雅の弟子である松坂の青木夙夜に師事した。

また、最先端の絵画を求めて、積極的に京都に上り画人たちの集まり「京都東山ノ会」にも参加した。

丹丘画「赤壁勝遊図」(一八〇二年 海住春彌氏蔵)
『勢和村史 資料編二』より複写



紫鳳画「夏景山水の図」(海住春彌氏蔵)
『櫛田川と多気町文芸史』より複写



本業は商人

江戸店を構えた相可の豪商大黒屋の主人、向井三右衛門。

せんもん えいし 専門絵師に学ぶ

若いころより画事に耽り、初め伊勢山田の画家、岡村鳳水(円山応挙の高弟、応挙十哲の一人)に師事。その後京都で松村景文(四条派の大家)に学ぶ。

〈江戸時代の人物〉

永井殊法 (1590~1676) 豪商三井高利の母

江戸時代、日本橋に呉服問屋「越後屋」を開き、今の三井グループの基礎を作ったのが松坂(現松阪市)出身の三井高利である。この高利の実母「永井殊法」は丹生の豪商永井家の出身。殊法は、若くして松坂の三井高俊に嫁ぎ、その商才を発揮する。8人の子どもを授かるが、8番目の子が後の高利となる。越後屋隆盛の源となる「現金販売、掛け値なし」は殊法の発案だったとする説もある。

三谷蒼山 (1779~1841) 四疋田組の大庄屋

四疋田の三谷家は江戸時代のおよそ二百年間、四疋田組の三十二村をまとめる大庄屋であった。蒼山は1779年に三谷家の四男として生まれ、大庄屋の職を継ぐ。当時はたびかさなる天災により農民は苦しみの中にあった。蒼山は大庄屋として私財をなげうち、寝食を忘れて田畑を開き水を引くことに努力した。また、倹約、貯蓄、凶作への備えを進めた。大庄屋として、藩と農民との間にはいり力を尽くしたことがうかがえる。

達伊兵衛と松田平兵衛 (江戸末期) 農業用水開削の功労者

北牧の光法寺の境内に80cm位の顕彰碑が建つ。江戸時代、北牧・中牧・鉏形は水の利が悪く、耕地の多くは畑として耕作されていた。村役人達伊兵衛は庄屋松田平兵衛の力を借り、工事に取り掛かる。私財をなげうち、村人とともに働き、1857年、ついに水路を完成することができた。これにより30%の田に水が届けられた。

〈仏僧〉

格宗浄超 (1711~1790) 黄檗宗の高僧

天啓公園にある旧法泉寺(1976年廃寺)はかつて黄檗宗の名刹として栄えた。この法泉寺の第五代住持をつとめた格宗は後に、黄檗宗総本山京都萬福寺第22世管長となる。格宗は、波多瀬十左衛門の子として波多瀬に生まれ、高橋善太郎の五男として育てられる。野呂元丈の弟にあたる。8歳で法泉寺第二代住持衝天の弟子となり、20歳で得度し諸国行脚に出る。帰省に際し、師白隠慧鶴が「我が半臂を失えり」と嘆いたと伝わる。

1786年、黄檗宗管長となる。黄檗宗管長は代々唐(中国)の名僧が渡来してそのあとを継ぐのが例であったが、日本人が管長につくのは甚だ稀であった。生前、格宗は嘘をつかなかつたと伝えられている。荼毘の後、遺言通り舌が残り、舌骨は下朝長の地藏堂に祀られている。

尼子合明 (1785~1854) 文芸にも秀でた学僧

丹生の西楽寺(現在は本楽寺)第六代住職。尼子家は戦国時代の猛将出雲国富田城主尼子晴久につながる。志摩国に落ち延びた一族はやがて丹生に移住、代々住職を務めた。合明は焼失した本堂・庫裡を再建、本堂裏に回遊式庭園「快樂園」をつくった。1830年に寺号を本楽寺に改める。本居春庭に入門し多くの歌をよみ、仏書、医学、雅楽書なども残した多才な人物であった。「合明日記」は合明が31歳から40年にわたって綴った日記で、近代庶民史、文化史の好資料であり、多気町指定文化財となっている。

小林慈海 (1900~1967) 法話の旅で人々を癒した僧

笠木出身。各地を廻って法話を続けた僧侶。「宗派を持たず、寺を持たず、生家へ帰らず」とし、生涯を各地の法話の旅に過ごす。温かい人柄とわかりやすい法話で多くの人に慕われ、敬われた。

〈文芸・文化〉

佐田林庵(1677~1754) 経塚を建てた文人

天啓池の東に蓮花峰と呼ばれる丘がある。その登り口に「経塚之碑」があり、雑木林を抜けると経塚の顕彰碑がある。林庵は江戸時代の中ごろの人で、相可にすみ、名を吉左衛門という。代々医者の家系で、林庵は書道や詩歌、文章の道にもすぐれていた。仏門に入り悟りを開く。修行のかたわら、白い石を集め、一つに一字ずつお経八巻を書き写した。その石の数は69380余りという。これを蓮花峰に埋め経塚とした。

西村和廉(1733~1807) 丹生の地誌を研究した文人

江戸時代、伊勢の国の代表的な地誌と言われる「勢陽俚諺」16巻、また「丹洞夜話」8巻を著したのが和廉である。和廉は紙問屋を営む丹生の西村家の六代目に生まれる。14歳の時に江戸へ出て家業に従事し、その余暇には謡曲や鼓を稽古し、儒学者井上蘭台の門人守能篤に漢詩を学ぶ。32歳の時に江戸店を廃業し丹生に帰る。その後丹生の肝煎・庄屋を拝命し、村政に奔走し小寺池の築造などを行う。その傍ら、地誌の調査・研究に没頭する。

晩年は本居大平、神宮寺無倪、三井丹丘などの文人と深く交わり、和歌、俳句、漢詩を嗜み、非凡な文芸作品も多く残す。

大西源一(1883~1962) 郷土史研究に心血を注いだ学者

弟国生まれの郷土史家。文学博士。鹿東と号す。大正4年より神宮司庁教学嘱託。神宮史の編集にあたり、傍ら南朝史の研究に力を注いだ。その他、三重県史、国史全般に及ぶ広い視野に立った著書・論文を遺した。主な論文に「大神宮史要」「北畠氏の研究」がある。「鹿東文庫」と名付けられている書籍・古文書などの史料は町文化財に指定されている。

折戸清三郎(1889~1979) 多芸多才な郷土史家

丹生生まれの郷土史家。萩圃と号す。大阪・四国の醸造会社等に勤務後、帰郷して丹生村役場に勤務。収入役、助役を歴任。その後、静岡などの水産会社に勤務。昭和17年に帰郷して農業に従事。郷土の史的事蹟の調査、資料収集、研究に努め、「立梅用水史」「丹生史」など郷土史に関する著作を残す。また、文芸雑誌「丹洞」発行、漢詩、書、墨絵、木彫など多芸であった。

達原実(1917~2005) 「戦友の遺骨を抱いて」の作詞者

筆名は達原ミレイ。土羽出身。従軍し、シンガポールの戦いの後、軍歌「戦友の遺骨を抱いて」を作詞した。この歌は従軍兵士の中で流行した。また、しあわせの宮(社名は小林慈海による命名)の宮司でもあった。

〈社会〉

油田篤太郎(1885~1971) 教育行政に尽力

車川出身。油田醸造場最後の当主。義務教育国庫負担運動の先頭に立った七保村(現大紀町)村長の大瀬東作と深い親交があった。昭和31年に三重県教育委員会教育委員長となる。

中西功(1910~1973) 社会運動家から政治家へ

土羽出身。南満州鉄道の社員として中国に渡る。日本の共産主義運動の活動家、中国問題の政治評論家。戦後、参議院議員を一期つとめる。